

試論ベルナル＝ラザール（下）

——シオニズム批判を中心とする後期思想の展開——

菅野賢治

《同化主義批判》

ドレフュス事件発生から三年、一八九七年秋になってようやく、南米ギアナの流謫の地にあるユダヤ系将校の一件が再び人々の耳目を集める頃には、すでに同化によるユダヤ問題の解決が不可能であるばかりか、むしろ、その同化のパラダイムこそが反ユダヤ主義に対峙する上で最大の桎梏になっているという見方に達していたベルナル＝ラザールが、フランスの「同化ユダヤ人」たちのあり方をめぐって否定的評価の度合いをますます深めていったことは、彼が一八九七年の論説「連帯」を、一九〇一年、「ナシヨナリズムとユダヤ解放」の一部として再録するにあたってほどこした、次のような加筆からもしっかりとうかがえるだろう（「」内が加筆部分）。

フランスのユダヤ人を例にとつてみよう。わたしは彼らのことならよく知っている。いざという時に彼らがどのような行動に出る人々であるのか、よく心得ている。彼らは、国外のユダヤ人たちの連帯をいっさい拒否するにとどまらず、自分たちの臆病さが生み落とした諸悪の責任までをも国外のユダヤ人に負わせようとしてきたのだ。生粋のフランス人よりもさらに自国礼賛的になるだけでは飽きたらず、ユダヤ人が解放された国々ではたいていそうであるように、自分たちのあいだに存在していた連帯を断ち切ってしまったのだ。「その結果として、苦しみ喘ぐ同胞の一人を擁護するために、三、四十人のユダヤ人を見つけるのがやっとなという時に、祖国なるものの熱狂的な信奉者たちと一緒に招いてしまったのだ。」ユダヤ人たちは相互に遠ざけ合った。そして、ユダヤ人といふ名称を恥辱として受けとめるようになった。⁽¹⁾

一八九九年、レンヌ再審において再び有罪判決、しかし同時に大統領令による特赦という、まさに妥協の産物としてドレフュス事件が一応の收拾を見たあとに、ベルナルル・ラザールが、はじめて、事件の悲劇性をフランス・ユダヤ社会の同化主義に直接帰着させようとした数少ない言及のひとつである。ドレフュス元大尉を救うためではなく、彼が監禁されている「悪魔島」に歩哨に立つためなら、何千人ものフランスのユダヤ人が名乗りを上げかねないほどであったという、たしかに誇張とも受け取られかねないこのような論断が、今世紀、ドレフュス事件通史の上で、あるいはフランス・ユダヤ共同体の記憶のなかで、ベルナルル・ラザールの名を純粹なドレフュス派「知識人」として取り上げにくくする最大の要因となったことは疑えない。

しかし、この時点でフランスのユダヤ人はもはやベルナル・ラザールの眼中になく、「ナシヨナリズムとユダヤ解放」の力点は、東欧、中東、北アフリカのユダヤ人たちがフランスのユダヤ人と同じ轍を踏むことのないよう、あらかじめ警告を発することにおかれている。

ロシア、ルーマニア、ベルシャ、モロッコのゲットーで苦しんでいる何千人、何万人という気の毒なユダヤ人たち、光を求めて叫び、鎖や縄の束縛を振りほどこうともがいている人々、彼ら全員に向かって、われわれとしては次のように言おう。「同化は、あなたがたを新たな鎖と縄で束縛することになるだろう。あなたがたの救いは、あなたがた自身が所有する土地に住むようになる日に、はじめてもたらされるであろう。たしかに、同化によって、あなたがたは束の間の誇りを手にするかもしれない。法によって自由が認められるかもしれない。しかし、常に人々の感情と偏見が、その自由を無効にしようとしてやまないであろう」と。⁽²⁾

「あなたがた自身が所有する土地」——それでは、ベルナル・ラザールは、ドレフュス事件から同化主義の否定を経て、シオニズムへとそのまま歩を進めてしまったのか？ とすれば、それはいかなるシオニズムなのか？ この点に関する検証は本稿後半に譲り、ここでは彼の同化主義批判の徹底ぶりを確認しておきたい。

同化は、ある鉄鎖から別の鉄鎖へ、拘束形態のすり替えにはかならない。国家により、法により認められた自由は、常に人々の感情と偏見によって無効とされる危険に晒され続けるであろう。よって、諸外国のユダヤ人は、決して「人権宣言」の国のユダヤ人に羨望を抱くには及ばない。大革命により市民として解放され、二世代、三世代をかけた同化に努めた結果が、ドレフュス事件として露呈した「このさま」なのだから……。このような悲観を単なる悲観

として片付けることを許さないのは、たとえば、一八九五年一月から五月にかけて行われた国会審議の趨勢である。ドレフュス大尉の位階剝奪式から十日余り経た一月十七日、賛成一五八票、反対二五七票をもって最終的には否決されたとはいえ、フランス共和国国民議会は、「三代遡って祖先のフランスにおける出生を証明することのできないすべてのフランス人」を公職から排除すべきであるという法案を真剣に議題にのぼせた。翌一月、「フランス行政管轄の諸機関においてユダヤ人たちの支配力を抑制するためにいかなる措置を講ずべきか」という問題について政府側の見解を質す議員質問が提出され、さらに五月の審議においては、第二、第三のドレフュスによる国家反逆罪に対する予防措置として、「ユダヤ人たちをフランス中央部に寄せ集めて住まわせてはどうか」という具体案が出されるなど、ナチス・ドイツの「例外法」や「ニュルンベルク法」、そしてヴィシー政府による「ユダヤ人身分規定」をも先取りするかのような議案が矢継ぎ早に提出された。³⁾ヨーロッパ諸国に先駆けてユダヤ人解放を成し遂げたフランス共和国が、わずか百年足らずでこの種の議論に逆戻りするという状況は、ベルナルルラザールが述べるとおり、現在の居住地における政治的解放をこれから勝ち取ろうとしている諸外国のユダヤ人たちにとって、きわめて不吉な兆候と見なさざるを得ないだろう。

しかし、であるからといって、ユダヤ人が自らの「土地」を獲得し、そこで真の自由を享受するなど、実現のために数世紀をも要する夢物語にすぎないのではないか。目の前の課題は、やはり特殊な法制度の軛に繋がれているユダヤ人たちの政治的解放を、現在のそれぞれの居住地で実現することではないか。つまり、フランス共和国が「クレミュー法」をもってアルジェリアのユダヤ人を遇したように、国家の市民としての権利をユダヤ人も等し並みに享受できるよう、東欧、北アフリカ諸国の統治者に働きかけてゆくことではないのか……。ベルナルルラザールは自問自答の形式でこのような反論を想定し、さらなる反論を用意する——それでは、市民権の獲得と同時に反ユダヤ主義の

軛に繋がれてしまったアルジェリアのユダヤ人の現状を、一体どう説明するのか？

理由もいきさつも知らないまま、ある朝目覚めたら、彼ら「アルジェリアのユダヤ人たち」はフランス市民になっていた。以後二十年間、無知と極貧のために不正な選挙工作の餌食となり、投票用紙を高く売りつける人々の利益だけのために自分たちの権利を行使してきた。市民という肩書きを得て、彼らは一体どんな恩恵に浴しただろう。この市民たちは、今日、作業場や工場から追い立てられ、その選挙権はおろか、生存権さえもが疑義の対象とされるにいたっているのだ。⁽⁴⁾

宗教的な反ユダヤ感情を別とすれば、アルジェリアにおける近代反ユダヤ主義の起源は、皮肉なことに「クレミュー法」施行の約一年後、一八七一年七月の「反ユダヤ同盟」創立に求められる。アルジェリア県で実施されるあらゆる選挙において、新しく選挙民となったユダヤ人たちは、急進主義や社会主義に抗して共和派穏健派やオポルチュニストの候補者を当選させるよう長老会議を介して本国の政治団体から指示を受けているとして、ユダヤ人からの選挙権剥奪、つまり「クレミュー法」の撤廃を求める運動である。運動は一八八〇年代、実力行動の段階に移り、ロシアのポグロムをそのまま移しかえたような反ユダヤ暴動がアルジェリア各地に拡大する。「われらが自由の木をユダヤの血で潤さん！」——「反ユダヤ同盟」の領袖マックス・レジスに帰せられているこのスローガンのもと、アルジェリアの反ユダヤ主義は、一八九八年、本国のドレフュス事件論争に呼応するようにして頂点を迎えた。同年、エドゥール・ドリュモンが国民議会選挙に出馬し、見事当選を果たしたのがアルジェの選挙区からであったことも決して偶然の符丁ではない。⁽⁵⁾

九六年の夏、ベルナルルラザールはそのアルジェリアを訪れている⁽⁶⁾。現地で、彼は、反ユダヤの暴徒がユダヤ人居住区を襲撃し、労働者たちを棍棒で殴りつけ、妊婦の腹に小便をかける様を目撃した⁽⁷⁾。その体験が、ここで既存国家による外からの政治的解放の虚無を結論づけるための悲しい根拠となる。アルジェリアもフランスの一部である以上、現地のユダヤ人も本国のユダヤ人と同じ権利を享受せねばならないという、同化主義の論理的帰結として地中海を越え、はじめて海外で適用されたユダヤ解放政策が、実施から三十年も経ずして、ベルナルルラザールによりユダヤ同化主義の限界を示す指標として取り上げられる運命にあったことは、まさに歴史の皮肉といわざるを得ない。

《社会主義をつうじての解放——ジョレス批判》

ならば、社会主義による解放はどうか。第二インターナショナル（一八八九年成立）の枠組のなかで、全ヨーロッパ的なプロレタリアートの連帯と解放を指向する十九世紀末の社会主義運動の文脈に、ユダヤ問題はどのような位置を占めるのか。

一八九七年九月、第一回シオニスト会議の約一か月後に開かれた第一回ユダヤ人労働者・社会主義者大会において、「リトアニア、ロシア、ポーランド・ユダヤ人労働者総同盟（ブント）」が結成された。ロシアの社会主義者ウラジミール・メデムに率いられ、カール・レンナーやオットー・バウアーといったオーストリアのマルクス主義者たちが唱えた「非領土的自治」の理論に依拠するブントは、「個々のユダヤ人はどこに住もうと民族共同体との関係を主張でき、彼ら自身の言語を使い、また独自の教育、文化を発展させる権利を有している」と主張し、生まれたばかりのシオニズム運動と鋭く対立した。「社会主義、民主主義的な社会の建設が、遅れたトルコでどうして可能であろうか。

そのための条件がヨーロッパに於いてすらまだ熟していなかったというのに。⁽⁸⁾こうしてブント主義者たちは、ユダヤ人の民族的、社会的諸問題は、ブルジョア社会への同化や新天地への移住によってではなく、社会革命により、彼らが現在居住している場所で解決し得るものであるし、また解決されねばならないとする。

ベルナル＝ラザール自身、全ヨーロッパ的規模で隆盛する社会主義運動のなかで各地のユダヤ人労働者グループが担う役割に、旧弊なユダヤ教からの解放と、新たな社会問題の解決への期待を同時に託そうとした時期があった。九四年刊行の『反ユダヤ主義、その歴史と原因』の後半部で、彼は、ユダヤの伝統の数少ないポジティブな遺産として、近代のユダヤ人たち——あくまでユダヤ教の教義から解放されたユダヤ人たち——の手に残された「正義」の観念、「反抗者」の精神に価値を見出そうとしていた。「タルムードはユダヤ人のすべてを墮落させてしまったわけではない。タルムードを放棄した人々のなかには、正義、自由、平等が現世において到来を見なければならぬという信念を保ち続けた人々がいた。そして、ヤヴエの民こそが、その実現のための使命を負っていると考える人々が数多くいた。これまで、あらゆる革命運動にユダヤ人が関わってきた理由もこうして納得がゆく⁽⁹⁾。また、哲学におけるスピノザ、文学におけるハイネ、社会思想におけるモーゼス・ヘス、マルクス、ラサールの例を取り上げ、彼ら皆、「宗教や信仰を放棄したか否かによらず、遺伝的に、また教育上、ユダヤの民族的な影響（influence nationale juive）を受けた⁽¹⁰⁾」ことにより、偉大なる革命家として自己形成を遂げたのだ、と断言する。そして、ロンドンの『労働者の友』、ニューヨークの『労働者新聞』をはじめ、オランダ、ドイツ、ポーランド、オーストリアでもユダヤ人労働者たちの手で盛んに刊行されはじめた社会主義機関紙を紹介しながら、次のように述べる。「こうした労働者集団は、古き信仰心から解放され、あらゆる宗教、信仰を捨て去っている以上、もはや語の宗教的な意味においてユダヤ的なものではない。それは民族的な意味においてユダヤ的な集団であるのだ。祖国を捨ててきたロンドン

あるいは合衆国のユダヤ人たち、つまり迫害の舞台となったポーランド、とくにロシアを逃れ出てきたユダヤ人たちは、彼ら自身のあいだで連帯を組んだ。彼らは集団を形成し、そして「ユダヤ語グループ」の名のもとに労働者大会に代表を送ったのである。彼らはヘブライ語混じりのドイツ語特殊言語を話す。話すばかりではない。その固有語によってプロバガンダ用の新聞を発行し、印刷にはヘブライ文字を用いているのだ。「…」つまり、ここではユダヤ人が革命に参加している。しかもユダヤ人として、ユダヤ人であり続けながら、革命に参加しているのである。¹¹⁾

多くはロンドン、ニューヨークなど移住の地における連帯活動であるとはいえ、自分たちの文化（特に言語）を保存しつつ、ユダヤ人として、ユダヤ人であり続けながら社会革命に参画し得るといふこの主張は、数年後、九七年の結成時に確認されることとなるブントの綱領にそのまま連なるものだ。このような主張、そして「ユダヤの民族的な影響」といった表現が、九四年の著書全体の結論——すなわちユダヤ教とともにユダヤ的精神も消え失せ、それとともに反ユダヤ主義も自動的に消滅するという、ドレフュス事件以前のベルナル・ラザールが歴史から引き出していた結論——とのあいだに齟齬をきたしていることは誰の目にも明らかであろう。『反ユダヤ主義、その歴史と原因』の後半部には、ユダヤ教とともに消えゆく運命にあるユダヤ的精神と、ユダヤ教から脱したのち「革命の良き酵母」として残存するユダヤ的精神という、明らかな論理的矛盾がそのまま投げ出されてあるのだ。

フランスにおいても、前述の「モンマルトル友好同盟」や「ロシア・ユダヤ人学生協会」など、東欧からのユダヤ人学生、労働者たちによるさまざまな組織が、九〇年代、徐々に活動を開始していた。ロンドンの同名組織に比べて規模は小さいものであったが、「ホヴェヴェ・ツイオン（シオンを愛する者）」のバリ組織も存在した。また、法学者チェルノフがその回想録『文明の坩堝にて——ドレフュス事件からサン・ペテルスブルクの「赤い日曜日」まで』のなかで紹介している「ロシア・イスラエリット協会」のように、ユダヤ系「命ロシア人知識層からなるサークル」もあ

った。⁽¹²⁾ こうした労働者、学生、知識人たちは、多かれ少なかれ社会主義、無政府主義の影響を受け、ピンスケルの『自力解放』（一八八二年）に打ち出された国家としてのユダヤ人独立の思想を漠然とながらも受け入れる態度において、左派の概念的シオニズムを代表していた、と言うことができるだろう。⁽¹³⁾

イギリスやアメリカに比して組織化の過程でかなりの遅れはとったものの、ドレフュス事件を契機としてパリのユダヤ人労働者たちがはじめて一堂に会する機会が実現した。一八九九年九月十七日、ドレフュスに再び有罪判決を下したレンヌ再審に抗議し、ドリュモンら反ユダヤ主義の陣営に対抗する勢力を組織する目的で、ユダヤ人労働者たちが企画した一大集会である。当時の『レ・ドロワ・ド・ロム』紙、『ロロール』紙の報道から、集会の熱気をそのまま再現することができる。

ドリュモンやその手下どものカトリック的影響力に屈してしまった、おめでたい精神の持ち主にとって、「プロレタリアート」という言葉は、「ユダヤ人」という言葉とはどうしても結びつかないものに思われるだろう。無理もない話だ。『ラ・リーブル・パロール』紙によれば、イスラエリットは皆、大銀行家か金持ちの商人であって、そのなかに貧民は皆無——いたとしてもごく少数——である、とされているのだから。アリアア人の同僚たちとまったく同じ給与法のもとにおかれた労働者階級など存在しないことになっているのだから。[…]

われわれのフランスを牛耳ろうとわめきたてる一群の絶え間ない攻撃にさらされることにもついに倦み果て、また、味方の活動家たちのもとにも頼りとなる活力を見出すことができずに（最近ベルナル＝ラザールが指摘してみせたように、ジョレスさえも、われらが親愛なるジョレスさえもが、理性的な範囲内で反ユダヤ主義運動を容認している、というのだから）、パリのユダヤ人労働者たちは一堂に会そうとしている。

その人数が多数にのぼることは疑えない。

今夜、ラメー街の「民衆の家」にて、彼らは初の抗議文書と結成決議書の草案を作る予定である。「……」「反ユダヤ主義者たち」が敵対勢力として見出すこととなるのは、もはや中世においてそうであったように臆病で優柔不断な人々ではなく、断固たる意志と組織力を備え、力には力で応じる覚悟のできた人間たちである。⁽¹⁴⁾

土曜の夕、「民衆の家」においてユダヤ人労働者グループが催した集会は大成功のうちに幕を閉じた。

「イスラエリットたちはすべてロトシルドのような人間にちがいない」などと、ジェズユ「イエス」の手下どもが革命的社会主義の勢いを削ごうとして陰で触れ回っている噂が、単なる絵空事にすぎなかったということが示された。会場に詰めかけた人々の大多数はセム人種の労働者であり、その彼らが親密な雰囲気なのか、非ユダヤ人たちと腕を組んでいるのだ。ドリユモンが見たら何と言ったことであろう！「……」

市民ヴァレリーが立ち、演説を行った。「……」裏切者は元教皇庁の兵士、カトリック教徒のエステラジーであるというのに、ドリユモンは、あいもかわらず、フランスを売ったのはユダヤ人であると信じ込ませようと躍起になっている、と。「……」

続いてシャルル・モラトが発言を求め、次のように宣言した。無政府主義者や社会主義者にとっては、アーリア人もセム人も、白人も黄色人も黒人も、フランス人もドイツ人もなく、ただ、個々の人間がいるだけなのである、と。⁽¹⁵⁾

ベルナール・ラザールがその場に居合わせたかどうか、確認することはできないが（居合わせたばかりか、集会の

企画自体に彼が関わった可能性はきわめて大きい）、九五年以来孤独な闘いを強いられてきた彼の目に、反ユダヤ主義の声をはじめて公のものとし、（ユダヤ人＝ブルジョア階級）という永年の偏見を打ち砕こうとする、このユダヤ・プロレタリアートの連帯がいかに心強いものとして映ったか、想像に難くない。ここでユダヤ人労働者たちの代表がいささか性急ながらも強い口調で訴えている事柄は、労働者の言語に置き換えられた過去一、三年のベルナル＝ラザールの主張そのものであるといつてよいからだ。

しかし、その上でなお、われわれは『レ・ドロワ・ド・ロム』紙の記者が括弧のなかに書き留めている一節（傍点部分）を見落とすわけにはいかない。ジョレスさえもが理性的な範囲内で反ユダヤ主義を容認している、というこの挿入句が、『ラ・グラン・ルヴュー』誌の九九年九月号にベルナル＝ラザールが掲載した痛烈な社会主義批判、ジョレス批判の一文「ユダヤの社会概念とユダヤ民族」に呼応しているからである。

ドレフュス事件史のなかにジョレスが占める位置について、ここでは概観に留めざるをえない。彼が九八年一月十五日の『ラ・ランテルヌ』紙（十六日付）に掲載された『改悛』の一文をもってドレフュス擁護運動に乗り出し、以後、毎朝『ラ・プティット・レピュブリック』紙の一面を飾る連載記事（『証拠』として九八年秋刊行）において科学論文のような明晰さをもって参謀本部の偽瞞を摘出するなど、精力的な活動をつうじて社会主義勢力の一部を強引にドレフュス主義に導き、再審派の勝利に大きく貢献したことは周知の事実だ。他方、九七年以前のジョレスが、フランス社会主義の伝統に深く根ざした反ユダヤ主義をそのまま引き継ぎ、過激なまでに反ドレフュス的な発言の数々を残していたことも、今日では誰しもが認めざるを得ない事実である。九四年十二月、ドレフュス逮捕直後の国民議会発言のなかで、「裏切者」となったブルジョア階級出身の将校など即時銃殺刑に処すべきであると訴え、ドリユモンから手放しの賞賛を得ていたこと。日付は特定できないが、九六年末から九七年の夏にかけて、第一の『誤審』の

冊子を携えて各界実力者のもとを訪ね、直接の説得を試みていたベルナルル・ラザールを「かなり冷淡な、敵意さえ感じられる態度で」迎え、事件の真相に関する詳細な説明にもかかわらず、その意味として社会主義の未来に直接関係し得るところを見抜けなかったこと。⁽¹⁸⁾ 九七年末、ゾラが最初の反ユダヤ主義批判を展開し始めた頃にいたって、なお『ラ・プチット・レピュブリック』紙上、ドレフュスの一件は共和派内のオポルチュニスト勢力がユダヤ財閥と組んで失地回復のために仕組んだ政治工作にすぎない、との見方に固執していたこと。さらに、「プロレタリア諸君、諸君はブルジョア内部のこの争いのいかなる側にも加担してはならない」として、九八年一月二十日付けの『ラ・プチット・レピュブリック』紙に大きく掲載された社会主義代議士グループのマニフェストに、⁽¹⁹⁾ 党派の足並みを乱す恐れから、個人としての信条を曲げてまで名を連ねてしまったこと（その後、社会主義陣営の事件への不介入を長く正当化することになったとして、ペギーら若い世代の社会主義者たちから激しい憤慨を買った行為）などである。

そののちドレフュス再審に向けてジョレスが演じた重要な役割は、こうした事件初期の誤謬を埋め合わせて余りあるものと評価され得るし、実際、ベルナルル・ラザールも、『証拠』の著者、ゾラ裁判の証言者としてのジョレスには限らない賞嘆の念を抱くにいたったわけであるが、それでもなお、ジョレスとその社会主義におけるユダヤ観の歪みだけは、時機を逸せず、厳しく指摘せずにはいられなかった。ドレフュス派陣営の最重要人物の一人となったジョレスに、敢えて——あるいは、そうであればなおさら——批判の鋒先を向けることで、社会主義がユダヤ問題に触れたとたんに図らずも露呈してしまう論理的限界をはっきり画しておこうとする狙いが、九九年九月の論説「ユダヤの社会概念とユダヤ民族」にはこめられている。

ジョレスはこう書いている。「ユダヤ人の社会概念は、取引の観念に基づくものであり、資本のメカニズムと完

全に調和する。」つまり、反ユダヤ主義と社会主義は、この点に関してはまったく見解の一致をみているということであろう。少なくともジョレスの社会主義についてはそうらしい。というのも、ジョレスはそう断言したあとで、次のようにつけ加えているからだ。いわく、ドリュモンの口を借りるとしても、「過度に陥る恐れもさほどなく」こう言って構わないだろう、「幾世紀にもわたる迫害から連帯を組む習慣を身につけ、動産による富の扱いにかけてはかなり以前から熟練の域に達しているユダヤ人たちは、われわれの社会のなかで並はずれた、恐るべき活動に手を染めている」と。さらにジョレスは締めくくりとして、彼の筆のもとにあっては重大な意味を持たざるを得ない、次のような結語を導いている。「反ユダヤ主義に浸されるといってもこの程度の社会主義ならば、自由な精神の持ち主のもとで異議の対象とされることもあるまい」と。⁽²⁰⁾

ここで、ジョレスの反ユダヤ主義はあくまで社会的、経済的な次元に属するものであり、人種的、民族的な反ユダヤ主義とは性格を異にする、といった類の弁護もさしたる意味をもつまい。ドレフュス擁護運動から反ユダヤ主義闘争へと連動しかけた気運が、宗教の相違、政治党派間の確執、社会階層の分化といった旧来の壁をわずかながらも突き崩しながら広がりを見せようとする矢先の一八九八年末、「われらの親愛なる」ジョレスの筆のもと、ドレフュス派社会主義の機関紙となっていた『ラ・プティット・レピュブリック』紙の論壇において、社会主義が旧態依然の反ユダヤ主義の紋切り型に拘泥する姿をさらしたことにより、フランス社会主義とユダヤ・プロレタリアートがドレフュス事件を触媒として結びつく無二の機会が水泡に帰してしまったことは、『レ・ドロワ・ド・ロム』紙の報道を見ても明白である。であればこそベルナル＝ラザールは、敵対勢力からドレフュス派内部の内輪揉めと評される危険もかえりみず、『身内』に対する批判に踏み切ったのだ。

だが、ここではユダヤ問題に対する政治家ジョレスの浅見をあげつらうことよりも、ユダヤ問題とフランス社会主義のあいだに依然未解決のまま放置されていた矛盾をベルナル・ラザールが見逃さず書き留めたということ自体に意味を見出すべきなのであろう。ドレフュス派知識人のまさに代名詞的存在となっていたジョレスさえ、フランス社会主義の伝統的な反ユダヤ主義から完全には解き放たれることがなかったという事実には、ベルナル・ラザールは一つの限界を見て取ったのだ。ジョレスが、ドレフュス擁護、参謀本部糾弾の主題からいったん離れ、社会主義者として筆を持ちかえたとたん、その筆に反ユダヤ主義的固定観念のインクが滲みはじめるといふ事象に、既存のフランス社会主義をつうじてのユダヤ問題解決が不可能であることを察知した、と言い換えてもよい。

ベルナル・ラザール自身、社会主義とユダヤ問題の関係をこれ以上突き詰めて論じることにはなかったが、その先、論理的帰結の在処を示すことはさほど困難ではない。すなわち、社会主義——少なくともドレフュス事件当時のフランス社会主義——から洗い落とすことの不可能であった反ユダヤ的偏執は、ベルナル・ラザール自身が述べているところとは裏腹に「過去と現在におけるユダヤ人たちの経済的状态に関する不十分な考察」⁽²²⁾などに由来するものではなく、そもそも「民族的なるもの」(le national)に関する高次方程式の解を、「社会的なるもの」(le social)の次元で求めることの本源的な無理に起因するものではないか。そして、ベルナル・ラザールが、パリのユダヤ人労働者の決起集会にいかにも励まされる思いを味わったとしても、すでにその頃には、「ユダヤ人IIブルジョア階級」という社会主義の古い偏見の構図に各国各都市のユダヤ・プロレタリアートの存在という厳然たる社会的現実をその都度対置せしめることにも倦み果て、連帯による、居住地における、社会変革の一端としての解放というブント主義の「非領土的自治」に連なる指針からも徐々に離れて、「外」へ、つまりシオニズムへと、解決の新たな糸口を探るようになっていたのではないか。かつてユダヤ人であることの現代的意義としてかろうじて救い上げられていた社会革命

参加の可能性が、一九〇一年の論稿「ナショナリズムとユダヤ解放」のなかで仮借なく切り捨てられる様を見るにつけても、そのような推測を深めざるを得ない。

あなたがたは、社会変革によってユダヤ人に対する憎悪も消滅する、などという期待を抱いてはいないか。しかし、見てみたまえ。オーストリアでは、すでに「社会主義は反ユダヤ主義的なものとなるう、さもなければ無であるう」と言われ始めている。あらゆる改革派の著述家たちにおいて、あなたがたのことが問題となると、常に同様の不正が見いだされる。ドリュモンは、ブルードン、フリーエ、トゥスネルに依拠し、また、バクーニンを引き合いに出す場合でも、それはもっぱらマルクスのことをドイツ系ユダヤ人と呼んではばからなかった人物としてなのだ。だから、はじめから侮蔑の対象とされることがわかっている家に入ろうとしたり、除け者にされることがわかっているテールブルに着こうとしたりして躍起になるのは止めたまえ。あなたがた自身で、自分たちの家を建てる準備を整えるがよい。あなたがたの方では、その家に万人を迎え入れ、「ユダの国から正義と友愛が生まれた」と言われるようにしなければならない。⁽²³⁾

解放の可能性を、社会主義革命、非領土的自治の方向に漠然と求めようとするユダヤ・プロレタリアートに対し、ベルナル＝ラザールは、既存の社会主義、とくにフランス社会主義に期待を抱くことは中止すべきであること、そして、はっきりと領土的自治、シオニズムを指すべきであること——それが、いかなるシオニズムであるかという点はいったん措くとして——を訴え始めている。その時、ドレフュス事件をきっかけとして一度は限りなく接近し、ジョレスとベルナル＝ラザールという二人の人物を接点とすればあるいは交わり得たかもしれない、フランス社会

主義の潮流とユダヤ労働運動の潮流は、再びもとの平行線の位置関係に戻っている。かくしてフランスにおいては、社会主義、ユダヤ・プロレタリアート、シオニズムの文脈が交差する機縁が、以後二十年近くにわたり失われることとなった。三者がふたたび出会うためには、第一次大戦後、ヴィクトール・パッシュュラの世代を待たなければならぬ。

《実践的シオニズム——連帯と慈悲》

エルサレムで死ぬという、ユダヤ教徒の永遠の願いまでを含めて言葉以前のシオニズムと呼ぶならば、それは「離散」の時から、いや、バビロン補囚の時代から存在していたと言わなければならぬ。しかし、そうした宗教的な帰郷願望とは別に、非宗教的、現世的なパレスチナ希求が存在する。エルサレムで死ぬためではなく、生きるための回帰思想というべきものである。さしあたり範圍をフランスに限定してみただけでも、ヘルツル以前の、いわば「^{プロト}シオニズム」の足跡を、十九世紀の初頭にまで遡って辿り直すことができる。

『諸国民と諸土の正義に対する呼びかけ』（ストラスブル、一八〇一年）の著者ミシェル・ペールド・テュリックは、フランスのユダヤ系市民としてはじめて弁護士資格を手にした人物であった⁽²⁴⁾。彼は、すでに nation といふ明確な表現を用いながら、宗教としてではなく民族としてのユダヤの同一性を訴え、ヨーロッパ全土に離散したユダヤ人たちが、もしも解放の途上で障害に出会い、フランスのユダヤ人たちと同じ市民権の獲得が困難な状況に追い込まれるようなことがあれば、彼らは武力に訴えてでも自らの古き領土の奪還を志すべきである、という主張を展開していた。⁽²⁵⁾ 四〇年後、一八四〇年には、メッスの大ラビ、リオン・マイエール・ランペールが、『アブラ

ハムから一八四〇年にいたるへ『ブライ民族史概説』のなかで、種々の理由からフランスに移住してきたイタリア人、ギリシア人、ポーランド人たちが、いつの日か祖国への帰還を夢見ることが許されているのに、ユダヤ人だけが「祖国」への夢を放棄しなければならないという法があるうか、との疑問を投げかけている。⁽²⁶⁾ 四四年、『イスラエリット古文書』紙のサミュエル・カーンは、ロシアとポーランドにおけるユダヤ教徒たちの生活環境が極度に悪化しているとの報を受け、迫害の末、移住を決意したユダヤ人たちに自由な開拓地を確保してやる必要を訴える。その候補地としては、フランスの植民地となつて間もないアルジェリアが取り沙汰された。⁽²⁷⁾

一八六〇年、時を同じくして、言葉以前のシオニズムを明確に打ち出す二冊の書物、エルネスト・ラアラヌの『新しき東方問題』と、ジョゼフ・サルヴァドールの『パリ・ローマ・エルサレム』が刊行された。⁽²⁸⁾ フランス政府の非ユダヤ人官吏であつたラアラヌは、ユダヤ人たちの歴史的宿命を高く評価し、彼らが近い将来に果たすべき偉大なる任務を素描する。ユダヤ人たちは、いつの日か、十八世紀にもわたる長い殉教の冠を戴き、祖先たちの土地に舞い戻るであらう。その土地で、彼らは「いまだ経験に乏しい諸民族に文明を伝達し、これまで満身に浴びてきたヨーロッパの光 (lumières) をもたらす」ことによつて、ヨーロッパとアジアの仲介者の役割を果たし、そこから「インド、中国へ、さらに開拓の余地を残す未知の諸列島にまで大いなる道を切り開かなければならない。」⁽²⁹⁾ 他方、『パリ・ローマ・エルサレム』の著者ジョゼフ・サルヴァドール (1796-1873) は、十五世紀末、スペインでの迫害を逃れて南フランスに移り住んだセファルディ一族の末裔としてモンペリエに生まれ、モーセの律法への関心から医師の職を投げうってユダヤ思想研究に没頭した歴史哲学者である。彼によれば、小アジアに文明と進歩をもたらすことのできる人種は、ギリシア人とユダヤ人に限られている。そしてユダヤ人は、数世紀来の深刻な退化にもかかわらず、依然パレスチナに新たな生命力を吹き込むことの可能な唯一の民族であり、東洋と西洋の間、ガリラヤとカナンの

海岸地方に高度なメシアニズムに鼓舞された新しい国家創設の使命を担わされている、とする⁽³⁰⁾。

ラアランヌ、サルヴァドール両者とも、ヨーロッパ文明と諸民族の運命という十九世紀中葉における歴史哲学の最大のトピスをそのまま引き受け、論拠として「人種」の概念を駆使するなど、エルネスト・ルナンのユダヤ史学とまったく同じ出発点に立ちながら、文明史におけるユダヤ民族の役割はとうに終わつたとするルナンとはまさに正反対の結論に到達している点が興味深い。すでに触れたとおり、ルナンのユダヤ史観は、フランス・ユダヤの同化を促す理論として十九世紀末のユダヤ系知識人たちに多大な影響力を及ぼした。その一方で、ラアランヌ、サルヴァドールなど、パレスチナにおけるユダヤ民族再生の可能性を探る一連の思想は、十九世紀フランスの文明史論の堆積のなかに置き去りにされ、ジャム・ダルメストテールやアンドレ・スピールによるサルヴァドール研究⁽³¹⁾など稀有な例をのぞけば、近年、イスラエルの思想史家ミハエル・グラエツにより再びフランス・ユダヤ史のなかに位置づけられるまで⁽³²⁾、ほとんど存在さえ知られることがなかったという事実は、フランス・ユダヤとシオニズムの関係をめぐって、すでに兆候的な意味をもつ。十九世紀中葉のフランスにおけるユダヤ民族再生論の「不発」と、十九世紀末から今世紀初頭にかけて、フランスのユダヤ知識層に顕著であったシオニズムに対する無理解とのあいだには、同じユダヤ同化主義の回路を經由して必然的な因果関係が秘められていると考えられるのだ。

そのような忘れられた著作と並んで、十九世紀のフランス・ユダヤを語る際に見過ごすことのできないのは、ユダヤ長老会議 (Consistoire) と一部の篤志家——その代表はやはりロトシルド家であろう——が提携し、有形無形の援助活動をつうじて国外のユダヤ人たちとのあいだに結ぼうとした連帯の絆である。すでに一八三三年、フランス・ロスチャイルド家の祖、ジャム・ド・ロトシルドと、のちの「世界イスラエリット連盟」会長、アドルフ・クレミューは、「博愛協会」(La Société Philanthropique) の内部に「ラ・ファイエット委員会」なる下部組織を作り、慈善

事業に着手していた（その名称からも察せられるとおり、当初、ロトシルドの名はもちろん、それがユダヤ人の組織であることさえ表向きには伏せられていた）。彼らの目的は、大きく二つあったと考えられる。世界に離散しているユダヤ人たちに援助の手を差し伸べ、相互の連帯を築くこと、そして、とりわけポーランドと中東のユダヤ人たちの境遇にフランス政府の目を向けさせること、である。⁽³³⁾ 第一の目的に沿って、実際に一八四〇年代から、アレクサンドリア、コンスタンティノーブル、カイロ、ダマス、トリエステ、イズミール、そしてエルサレムに、現地のユダヤ教徒たちのための学校や病院が建設され、フランスの長老会議から教員や医師が派遣されている。第二の目的は、当時のヨーロッパ情勢を確実に反映したものと見えるだろう。第三次ポーランド分割以来、ユダヤ系、非ユダヤ系を問わず多くのポーランド人移民を受け入れ、ロシア帝国に抗するポーランド独立運動を支援し続けてきたフランスは、他方、中東においてもオスマン帝国の弱体化にともない、やはりロシアとのあいだの覇権闘争に突入していた。そうした文脈にあって、ロトシルド家とユダヤ長老会議は、東欧からの移民の保護を訴えつつロシアの圧政に抗議の声をあげ、同時に中東においても、保護の対象をカトリック教徒からユダヤ教徒にまで拡大することによって、できるだけ多くの住民をフランスの文化的影響圏内に入れておくことが、将来的に必ずフランスの国益にかなうものであることを、交替の激しかった十九世紀フランス諸政府の各々に理解させようと努めたのである。

続く一八五〇年代、国内ではルイ・ボナパルトの治世下にユダヤ人に対する公立学校への入学制限、公職の停止処分といった出来事があいつぎ、⁽³⁴⁾ 国外では、依然ロシアと中東におけるユダヤ人迫害が激化の一途をたどるなか、ジュール・カルヴァロ、イジドル・カーン、アリストイッド・アストリュック、シモン・ブロックといった人々を中心として、プロテスタントの世界組織「世界福音連盟」に倣ったユダヤ国際組織の設立を求める声が高まった。こうして、一八六〇年に創設された「世界イスラエリット連盟」(l'Alliance Israélite Universelle)——以下、A I U——

は、設立当初こそユダヤ長老会議から不信と敵意の目を向けられながらも、六三年にクレミューを会長として迎えてからは宗教界との融和を徐々に深め、世紀末までに、アルジェリア、モロッコ、バルカン諸国、ルーマニア、ロシア、そして中東各地のユダヤ共同体を傘下におさめる世界最大のユダヤ組織にまで成長してゆく。⁽³⁵⁾

トルコの国有鉄道事業に関わって大成功を収め、おもにパリを活動拠点としていたドイツ人銀行家モーリッツ・ヒルシュ（1831-1896）——パリではモーリス・ド・イルシュ男爵を名乗った——も、はやくからA I Uの協力者として名を連ねていた。A I Uの活動とは別に、しかし博愛と連帯の同じ精神をもって、イルシュは、一八九一年、莫大な資金を注いで「ユダヤ植民協会」(Jewish Colonization Association) を設立する。イルシュ自身は必ずしもシオニズム的な発想の持ち主ではなかった。パレスチナ入植事業は「好敵手」エドモン・ド・ロトシルドが先代から継承した慈善活動の領分として一線を描き、彼の「ユダヤ植民協会」はもっぱらアルゼンチン、ブラジル、カナダに向けた東欧ユダヤ人の入植を奨励する。イルシュ亡き後も、ナルシス・ルヴァン⁽³⁶⁾や哲学者エミール・メイエルソン⁽³⁷⁾が事業を引き継ぎ、のちにはロトシルドがパレスチナに建設した入植地の経営をも一部肩代わりするまでにいたっている。

以上、きわめて概括的ではあるが、すでに十九世紀初頭からフランスにも確固として存在した「原シオニズム」的な思想の流れ、そして、世紀後半、博愛精神と国際的ユダヤの連帯にもとづく慈善事業の発展過程を眺望した。圧政下に苦む、主として東欧のユダヤ人たちの国外移住を手助けする活動として、とくにパレスチナを指向する流れを、以下、慣例によりヘルツルの「政治的シオニズム」から区別し、「実践的シオニズム」と呼ぶこととする。

ラアランヌ、サルヴァドールなど、先行する時代のパレスチナ回帰の思想をベルナルル・ラザールが知っていたかどうか、定かではない。仮に知っていたとしても、ユダヤ教の消滅とともにユダヤ的精神の消滅、同時に反ユダヤ主義の消滅を運命づける『反ユダヤ主義、その歴史と原因』の著者にとって、二千年の時を遡って祖先の土地に回帰

するなどという発想は荒唐無稽以外の何物でもなかったであろう。

他方、A I Uに代表される国際的なユダヤ連帯主義についても、前述のとおり、ドレフュス事件以前のベルナル＝ラザールは、その存在意義を真つ向から否定する論旨を展開していた。宗教としても、民族としても、とうに失われてしまった同一性を過去に遡って蘇らせ、人工的な連帯を築こうとしても、それは解放ユダヤ人たちの同化の妨げとなるばかりでなく、ユダヤ教からの解放さえ遂げていないユダヤ人たちの覚醒をも遅らせ、さらに悪しき副作用として反ユダヤ主義の再燃を煽るばかりだ、という見方である。こうした論調が、A I Uの伸長をユダヤ禍の前触れとして常に気につけ、對抗勢力として「世界反ユダヤ連盟」設立の必要を訴えていたドリュモンら、反ユダヤ主義者たちの論調に囚らざるも接近し、時として紙一重の性質を帯びるものであったことは、ウィルソンも指摘していたとおりである。⁽³⁸⁾

ドレフュス事件を経て、「非ユダヤ主義」から「ユダヤ・ナショナリズム」へと一八〇度の転回を遂げたベルナル＝ラザールにおいて、A I Uに対する評価が変質を被ったとしても当然である。しかし、それはあくまで変質であって、否定から肯定への転換ではあり得なかった。ドレフュス事件ののち、彼のユダヤ連帯主義批判は、別の論拠をもって、別の角度から繰り返されることとなる。一八九七年の「連帯」と一九〇一年の「ナショナリズムとユダヤ解放」とのあいだのテキストの異同に、そのことをはっきりと確認することができる（「」内が加筆部分）。

西欧のユダヤ人たちにおいて連帯の本能は衰退した。「世界イスラエリット連盟」が発足した時、それはすでに減退の一端をたどっていた。しかも、連盟は、そうした本能を蘇らせるのに貢献できる性質のものではなかった。なぜなら、その組織は、たちまちのうちに単なる慈善活動「ないし教育事業と化してしまい、東方におけるフラ

ンスの影響力、つまりカトリックの影響力を広げることをもって旨とする「自国礼賛的な制度」になり果てたからである。⁽³⁹⁾

短い言及ではあるが、種々に絡み合う要素をはらんだ複雑な議論である。かつてA I Uの存在意義そのものを否定していたベルナルル・ラザールが、いま問題にしようとしているのは、A I Uがパレスチナで行っている事業の質である。その場合、実践的シオニズムのあり方について「自国礼賛主義」(chauvinisme)とは、どのような側面を指して言うのか。

A I Uのパレスチナ事業が、現地の既存ユダヤ共同体の保護と活性化(迫害ユダヤ教徒らの法的保護、学校、病院など公共施設の建設)から、入植者の派遣と新たな入植地の開拓へと、はっきり重心を移していくのは一八九〇年代のことである。前述のとおり、発足時におけるA I Uの主旨は、世界に離散したユダヤ共同体に連帯と友愛の手を差し伸べ、とくにパレスチナについて、オスマン・トルコの圧政下に苦しむユダヤ教徒に有形無形の援助を行いつつ、中東におけるフランスの文化的影響圏を確保することに存した。アルザス出身のユダヤ人でA I Uの創立当初からの活動家であったシャルル・ネテールが、一八七〇年、ヤファ近郊に建設したパレスチナ初の近代的な農業学校「ミクヴェ・イスラエル」がその典型的な例であろう。これは現地のユダヤ子弟を対象とし、フランス式の教育と農作業の実践を通じて、イスラムの土地におけるユダヤ人たちの「再生」を企図する教育事業であった。⁽⁴⁰⁾

こうしたA I Uのユダヤ連帯主義も、一八八〇年代、大きな転機を迎える。グラエツの表現を借りるならば、「幻滅は遅からず訪れた。パレスチナを指向する連盟の活動は遅々として進まず、しかも、その範囲がごく限られたものであることが明らかになったのだ。そして、特に東ヨーロッパのユダヤ人たちの置かれた状況の悪化が、問題の所在

をある意味でより明らかにしてくれたといえるだろう。つまり一八八〇年代初め、ロシアにおけるポグロムにともない、どこへ行けばよいのか？——つまり、どこへ移住したらよいのか——という問いが発せられ、その時、イデオロギーの方向づけが決定的なものとなったのである。⁽⁴⁾「実際、迫害を逃れたユダヤ移民が四方の道に溢れ出ているという時に、なぜ、保護の対象を特定の地域の既住ユダヤ人だけに限定する必要があるのか。こうして、一部の根強い反対にもかかわらず——たとえばネテルは「ミクヴェ・イスラエル」への東欧ユダヤ人受け入れには終始否定的な態度を貫いた——、A I Uは、現地ユダヤ人の啓発によるパレスチナ再興から、新たな入植者を送り込むことによるパレスチナ開拓へ、文字どおりの実践的シオニズムへと方向転換を遂げ、九〇年代、パレスチナ回帰の思想を鮮明にする東欧ユダヤ人団体「シオンを愛する者」のパリ組織との連携を密にしながら、ロトシルドからの資金援助を取り付け、その入植活動を盛んに支援してゆくことになる。

すでにいくつかの指摘が可能だろう。まず、A I U自体はフランスに本拠を据え、フランス・ユダヤ人の有志たちによって運営される組織でありながら、入植そのものの主体は、ポグロムを逃れて東欧からフランスに移り住んだロシア、ポーランドのユダヤ人たちであったということ。入植によるパレスチナ再興とはいうものの、フランスのユダヤ人たちにとって自らのパレスチナ入植、定住など問題にならなかつたのである。ここから、A I Uの実践的シオニズムは、事実上、フランス領内に溢れた外国籍ユダヤ人たちの「厄介払い」ではなかつたかという意地の悪い見方が生まれる。実際、一八八〇年ごろから、突如、大挙して国境付近に姿を現し、主要駅の構内、都市部の空閑地などに集団で仮住まいを始めた東欧ユダヤ移民たちへの行政的対応が叫ばれるようになると、A I Uもフランス全土のユダヤ共同体に回状を送り、彼らの受け入れ先の確保に奔走した。だが、日毎に数を増す移民たち全員に落ちつき先を供給することなど不可能事に近い。なかには隣接する非ユダヤ社会の反ユダヤ感情をいたずらに刺激したくないとい

う理由から、移民の受け入れを一切拒否するユダヤ共同体もあったとい⁽⁴²⁾う。定住地としてフランス以外に適当な土地があるならば、そこへの入植を斡旋し、資金面での援助を行うという発想も、こうした状況下ではごく自然なものと見て受けとめられたであろう。フランス・ユダヤ人たちの一部に国外のユダヤ人との連帯を求める気運がいかに高まるうとも、フランスの内部にシオンの丘は存在し得なかった。翻って、流入ユダヤ人たちの側でも、A I U 活動員など一部の篤志家たちに対する恩義の念がいかに深かろうとも、数世代、十数世代前からガリアの土地に住み、ステッキを手に山高帽を被り、もはやフランス語しか話さないフランスの「イスラエリット」たちと自分たちとが同じ「民族」を構成しているなど、にわかには実感し得なかったはずである。マイケル・マラスの表現にしたがって、初期の実践的シオニズムを、「シオニズムなきユダヤ・ナシヨナリズム」による「ユダヤ・ナシヨナリズムなきシオニズム」の支援⁽⁴³⁾と位置づけておくことも、あながち的はずれな議論ではあるまい。

次に、そのことと深く関係して露仏同盟の現実がある（九一年政治協定、九四年軍事協定）。前述のとおり、かつて国際政治の舞台でフランスとロシアが覇権抗争を繰り広げていたあいだは、フランスが、A I U などの組織を通じてロシアと分割下のポーランドのユダヤ住民に保護の手を差し伸べることに政治的にポジティブな意味があった。彼らのフランス流入は、専制国家に対する民主主義国家の優越を示す一つの証拠たり得ていたのである。しかし、八〇年代後半、一転して両国のあいだに融和の気運が高まると、同じ流入の意味も反転せざるを得ない。いまや友好国となったロシアからの絶えざるユダヤ移民は、処遇の難しい、好ましからざる客である。九〇年代、年間数万人単位でロシアからユダヤ系住民が流出するという異常事態の前に、フランス政府が、名指してボグロムを告発することはおろか、大量流出の原因究明にさえきわめて消極的であったのは、ひとえに露仏同盟の蜜月に水を差さないためであった。和平成立の祝賀的雰囲気のみならず、フランス・ユダヤ世論の一部には、ロシア皇帝の親仏政策をもって過去の反

ユダヤ政策の責任を帳消しにしようとする向きさえ存在したという。⁽⁴⁴⁾ 国際政治の回転木馬が半周しただけで、同じユダヤ人移流民に与えられる政治的意味がかくも易々と逆転しまうものなのか。ベルナル＝ラザールによる次のような指摘は、フランス・ユダヤ世論のそうした日和見主義を辛辣にも言い当てたものと読むことができる。「西欧諸国の同化ユダヤ人たちが、隷属状態におかれた他のユダヤ人たちに、時折、施し物をする光景なら確かに目にする。だが、自分たちの兄弟であるというそのユダヤ人たちが現実には堪え忍んでいる境遇について、同化ユダヤ人が抗議したり憤ったりするという話はめったに耳にしない。兄弟同士であったことなど、すっかり忘れてしまったかのごとくだ。」⁽⁴⁵⁾

さらに、A I Uによる実践的シオニズムに内包された、多分に自国中心主義的な性格を指摘することも可能だ。A I Uが設立当初から掲げていた指針、すなわちパレスチナにおけるユダヤ共同体の再生を通じて中東にフランスの文化的影響圏を確保するという指針は、単に歴代フランス諸政府に自分たちの活動の意義を認めさせるための方便にとどまらず、実際に、文明の荒野とみなされた世界各地にフランス語とフランス文化の普及を目指す、いわゆる「文化帝国主義」全体の動きに確実に連動するものであった。つまり、A I Uがパレスチナにおける新たなユダヤ共同体のあり方として理想に掲げるのは、あくまでフランス国内の共和国化したユダヤなのである。極言を恐れず言えば、A I Uの中東事業は、フランス以外のユダヤ人たちを、現地パレスチナにおいて、フランスの同化ユダヤ人たちと同じような存在として再生させることもって旨とする文化事業であった、ということになる。こうして、既住ユダヤ人たちの子弟を対象とする場合でも、新たな入植者の子弟を対象とする場合でも、A I Uが運営する現地校においては、ヘブライ語の習得やイディッシュ語の継承はおろか、伝統的ユダヤ文化やパレスチナ前史さえカリキュラムに組み入れられることがなく、もっぱらフランス語によるフランス式教育が施され、初等教育の成績優秀者に開かれてい

るのも本国フランスの高等教育機関への道なのであった。⁽⁴⁶⁾ ほどなくシオニズム運動の一翼として勃興する文化的シオニズムの潮流との確執は不可避であろう。実際、二十世紀初頭のパレスチナ各地のユダヤ共同体では、主要言語としてフランス語を維持しようとするA I Uと、ヘブライ語以外の言語をすべて外国語扱いとするシオニストとのあいだで熾烈な言語闘争が繰り広げられることとなる。

ベルナルールラザールがA I Uのパレスチナ事業を評して「自国礼賛的」と言う時、まさに右のような組織と事業のあり方が指摘されている。「カトリックの影響力を広めることをもって旨とする制度」とは、たしかに誇張の誇りを免れないだろう。しかし、A I U主導の実践的シオニズムが、ユダヤ人のあり方を思考し、パレスチナの土地を眺めるにあたって、あくまでフランス文化の枠を通して行う性質のものであったことは否めない。とくに、パレスチナのユダヤ人たち——既住民であれ新入植者であれ——を対象とする教育事業が、フランス産ユダヤ同化主義の輸出や、その現地での再生産を企図するものであったとすれば、ベルナルールラザールがそこに意味を見出し得なかったとしても当然である。西欧のユダヤ人たちが失ってしまった連帯の本能を蘇らせる必要性の認識から生まれ、国家の枠を超えて互いに兄弟として連帯するという目的を掲げたA I Uの活動も、一方的な慈悲を通り越して「施し」の次元に墮するなら、いつでも単なる大國温情主義^{パテルナリズム}、文化的植民地主義に姿を変える危険に晒されている。翻って、フランス・ユダヤ共同体から有形の援助として資金を、無形の援助として同化主義を受け取った新入植者たちは、純粹に「シオンを愛する」心をいつしか見失い、民族としての自発性をも失って、大國の国家利益だけに唯唯諾諾とつき従う卑屈な被植民者の立場に転落する危険と常に背中合わせである。他のあらゆる植民地主義に伴うこの種の悪循環がパレスチナで再現されるだけに終わるなら、シオニズムの実践は、いかなる形であれ、おのずと本来の意味を失っていくだろう。ベルナルールラザールのA I U批判には、そうした危惧の念がこめられている。そして現実には、たしか

に彼の危惧する方向に向かいつつあった。一八九〇年代、一九〇〇年代のパレスチナにおいて、フランス・ユダヤ団体の全面的な支援を受けた入植地の状況としてウォルター・ラカーが描き出しているところを、ベルナル＝ラザールが当初からおおよそ見通していたと言っては、事後的に、あまりの先見の明を彼に帰することになるだろうか。「ロッチルドの寛大さに植民者たちが依存したことは、いくつかの否定的な結果を生んだ。男爵の代理人があらゆる活動に口を差しはさむのに最初多くの不平が存在したが、入植者たちは次第にそれを当然と見做すようになった。主導性をすっかり失くした彼らは、困難に遭遇するといつでもパリの方を向くのに慣れてしまった。[...]この長期にわたる博愛主義的な幕間の後、シオニストの主唱は、かくして純粋に営利主義的な投機的事業へと変化を遂げていた。これは、組織的物乞いを生活様式とする、墮落し非生産的なエルサレムの昔からのユダヤ人社会の存在よりは、好ましかつたに違いない。しかし、「ツイオンを愛する者」が夢みていたこととは、すっかりかけ離れていたのである。」⁽⁴⁷⁾

《政治的シオニズム——ヘルツルとの決裂》

一八九五年一月、ウィーンの日刊紙『ノイエ・フライエ・プレッセ』の記者としてドレフュス大尉の位階剝奪式を取材し、パリの民衆に染み渡った反ユダヤ感情の激しさを目の当たりにしたテオドル・ヘルツルは、同年五月——ベルナル＝ラザールが第一の『誤審』執筆に取りかかっていた頃であろうか——、「ユダヤ植民協会」のイルシュ男爵にパリで会見を申し入れている。六月二日、二二頁の覚え書きを携えてイルシュのもとを訪れたヘルツルは、パレスチナに向けた空前の規模のユダヤ人入植案を示し、資金面での援助を要請した。イルシュは「ユダヤ植民協会」の立場からできる限りの援助を約束しながらも、この男が「夢でも見ている」のではないかとの印象を隠せなかったと

いう。⁽⁴⁸⁾ 数日後、次なるエドモン・ド・ロトシルドとの会見を期してのことであろう、ヘルツルはロトシルド一族に宛てた「建白書」を執筆している。ロトシルドとの会見は実現をみないままヘルツルはウィーンへ呼び戻されることとなったが、その「建白書」のなかには「ユダヤ人国家」の構想がすでに明確に打ち出されていた。⁽⁴⁹⁾

九六年二月、ヘルツルの『ユダヤ人国家』がウィーンとライプツィヒで刊行される。出版と同時にドイツ語圏で大きな反響を呼び起こしたこの書物の噂を聞きつけたベルナルルラザールは、マックス・ノルダウにヘルツルのウィーンの住所を尋ね、三月十一日、直接手紙を書き送っている。フランス語版刊行予定の有無、そして、著書に打ち出された壮大な計画の実現のための具体的活動指針を今後フランスの世論にどのような形で訴えてゆくつもりなのかを、著者に問いただすためである。⁽⁵¹⁾ 同年七月十七日、再びパリに舞い戻ったヘルツルとベルナルルラザールがはじめて顔を合わせる。対談の内容については詳らかでない。「感受性と知性に恵まれたフランス・ユダヤ人の見事な典型」と、ベルナルルラザールの第一印象をヘルツルが日記に記しているのみである。その日の午後、ベルナルルラザールはヘルツルを「ユダヤ植民協会」のエミール・メイエルソンに引き合わせている。

ベルナルルラザールを介してメイエルソンからの働きかけが効を奏したのであるうか、翌十八日、「ユダヤ植民協会」会長ナルシス・ルヴァンの仲介により、ヘルツルとエドモン・ド・ロトシルドの会見がようやく実現をみた。会見はラフィット街のロトシルド邸にて、ルヴァンとメイエルソンの同席のもと、ヘルツルがロトシルド男爵にシオニズムの主旨を説明するという小講演会の趣を呈した。ヘルツルの話を聞き終えるや、ロトシルド男爵は、彼を十一世紀、第一回十字軍を呼びかけたピエール・レルミットになぞらえ、計画の壮大さに呆気にとられた表情であったという。その実現可能性について、トルコのスルタンの同意を得ることの困難、パリ、ロンドンの既存ユダヤ団体の抵抗など、男爵からいくつもの疑義が提出された。当面は従来のパレスチナ入植地の運営を充実させることで満足すべ

きであるとする男爵に、ヘルツルは「入植地は小振りの国家であり、国家は大振りの入植地であります。あなたは小国家を求め、わたしは大入植地を夢見ている、その違いにすぎないのです」と述べ、さらなる説得を試みたが、完全な理解を得るにはほど遠かった。⁽⁵³⁾

二十日、ヘルツルは「ロシア・ユダヤ人学生協会」に招かれ、ゴブラン街の集会所で講演を行う。この時はベルナル＝ラザールも同席している。ロトシルドとの会談ののち、やや意気消沈していたせいもあるうか、満場の聴衆を前にしたヘルツルの結論は、「わたしはまだ⁽⁵⁴⁾歩き出そう」と言っているわけではない——わたしは、ただ青年諸君よ、立ち上げれ」と言うのみである。」という表現にとどまっていた……。

以上、九五五年春から翌九六年夏にかけて、パリを舞台とする何気ない史実の羅列に見えながら、シオニズム史、フランス・ユダヤ史にとっては、その後数十年の流れを決する重要な数か月であったといつて過言ではない。パリで発生したドレフュス事件を起爆剤とし、ヘルツルにおいて理念化されたばかりの政治的シオニズムが、同じパリで、A I Uを介したロトシルドの資金援助や「ユダヤ植民協会」による慈善事業の形で久しく存在していた実践的シオニズムと出会い、そして決定的にすれ違ったのである。「行き違い」(une rencontre manquée)と、カトリューヌ・ニコ⁽⁵⁵⁾ーがその通史の副題として掲げた表現がまさにふさわしい、この二潮流のすれ違いとともにフランス・シオニズム史の幕が開いた。

ヘルツルの著書を知った九六年春から、第二回シオニスト会議（九八年八月）に参加するまで、ベルナル＝ラザールにおけるシオニズム観は、前述の実践的シオニズムに対する批判も含めて微妙に揺れ動いている。九七年二月の講演において、「われわれにとって欠かせないのは、民族として、つまり自由な共同体として再生することである。ただし、その共同体が、現在われわれが生きている資本主義的、抑圧的な諸国家の姿をそのまま受け継いでしまわな

い条件のもとでのことだ。」⁽⁵⁶⁾として、のちに彼が厳しく批判の対象とすることとなるヘルツルの国家主義の弊害を予測するような発言を残しており、また、すでに見たように「ユダヤ・ナショナリズム」と題して行った講演（同年三月）のなかでは、ユダヤ・ナショナリズムの具体的な実現形態として、あえて「国家建設」という表現を退け、「自由集團の組織」という言葉を用いていた。九七年、おそらくヘルツルやノルダウの推挙によるものであろう、ベルリンのシオニズム機関誌『ツィーオン』のフランス語部門主幹をつとめることとなったベルナル＝ラザールが、同誌に自ら掲載した二つの論説「自分自身であることの必要性」（四月三十日号）、「連帯」（五月三十一日号）においても、ユダヤ同化主義の徹底的な否定と、大胆なユダヤ・ナショナリズム論の展開にもかかわらず、解決の方向をシオニズムだけに収斂させまいとする慎重な論調を印象づけていた。

九七年夏、第一回世界シオニスト会議がバーゼルで開催される。ベルナル＝ラザールはヘルツルに手紙を送り、「非常に気にかかる一件」——無論ドレフュス事件を指す——のため参加要請に応じることができない旨を詫びながら、シオニスト会議が開催にこぎ着けたことを祝福し、「わたしは、これまで以上にユダヤ民族の力と、その力がありのままに確認される必然性を信じておりますし、そのために全力をもって協力する覚悟しております」と付け加えている。⁽⁵⁷⁾

翌九八年、ドレフュス事件のなかで一定の役割を果たし終えたベルナル＝ラザールは、第二回シオニスト会議への参加意志を表明する。参加に先立ち、イギリスの『ユダヤ世界』紙のインタヴューに答えて彼は次のように述べていた。「わたしは植民ということに関して、つまりパレスチナでの新しい入植地の建設と産業の移植については好意的に考えています。ただし、わたしがそう考えるのは、博愛主義的な理由によるのではなく、ある政治的視点に立つてのことなのです。フランスにシオニズムは存在しません。そして、わたしがシオニストであるといっても、それは

フランスのユダヤ人十万人のためではないのです。「…」問題は、劣悪な生活条件に疲れ果てた東欧の同胞たち数百万人をどうするかです。彼らにとつての未来をシオンに見出すという点において、わたしはシオニストです。⁽⁵⁸⁾悲惨にあえぐ東欧ユダヤ人の未来をパレスチナ入植に託するとしながらも、既成事実としての実践的シオニズムを支持しているのではないということは、博愛主義ではなく政治的視点に立脚するという彼自身の言葉からも明白である。しかし、それならば、なぜ「入植地の建設」「産業の移植」と言うにとどめ、「領土的自治」「国家建設」という表現をことさらに避けるのか？ 第二回シオニスト大会への参加直前、ヘルツルの政治的シオニズムに最も接近していた時期のベルナル＝ラザールにおいて、なお「国家」の一語に対する躓きが察せられる。

九八年八月、バーゼルには前年の二倍近くに膨れ上がった三四九名の代表が集まり、全ヨーロッパで登録されたシオニスト団体の数も前年の一一七から九一三にまで急増したことが確認された。当日、ベルナル＝ラザールが遅れて会場に到着すると、演壇ではノルダウが基調演説の雄弁を繰り広げている最中であつた。

ノルダウは、片腕を振りかざして彼を迎え、そして厳かに紹介した。「ベルナル・ラザール、気高く果敢なる強者！」会場を埋め尽くした参加者たちは一斉に席を立っていた。その名状し難いざわめきのなかから、たちまち熱狂的な喝采の嵐がまき起こり、それはいつ果てるとも知れなかった……。わたしのすぐ前で、ベルナル・ラザールは、不動のまま、啞然とし、一体どうしたことかといった表情で立ち尽くしていた。自分一人を食い入るように見つめる何千もの視線のなか、一步も踏み出せないといった様子であつた。一瞬、彼が逃げ出してしまふのではないかと思われたほどだ。そして、わたしは見た。死人のように蒼白だつたその顔がにわかには赤らみ、その穏やかな両目に、何か潤んだもの、きらりと輝くものが揺れ動いているのを……⁽⁵⁹⁾。

ドレフュス事件が全ヨーロッパ的に人々の関心を集めているということは、ベルナルルラザールも十分意識していただろう——彼は、まさにその国際世論の形成のために可能なかぎりの手段を尽くしてきたのだ——。しかし、彼個人の名がドレフュスの名に結び付けられ、国外のシオニストたちの胸にここまで深く刻み込まれていたとは、ベルナルルラザール自身、まったく予期せぬことであった。会議の開催期間をつうじ、彼の名は随所で取り上げられ、その都度、歓呼と喝采に包まれる。最終日、奇しくもパリからアンリ中佐自殺（九八年八月三十一日）の報が届くと、議場は「ベルナルルラザール万歳！」の連呼に沸き立ち、彼に握手を求めて駆け寄る人々で熱狂的な空気に包まれる。三十八年の生涯をつうじて、ベルナルルラザールが「栄光」なるものに関わりをもった唯一の瞬間が、この第二回世界シオニスト会議であった。

同時に、それは大きな失望の瞬間となる。

失望と疑問は段階的に訪れた。まず、参加者の資格を決定する代表制について。ベルナルルラザールがパーゼルに赴く以前から面映いと感じていたことは、形式上、彼が一度も訪れたことのないガリシア地方のトゥーフフという小さな町（現ポーランド）で組織されたシオニスト集団の代表として登録されていた点である（ベルナルルラザールは、のちのルーマニア取材旅行の帰途、はじめてその町に立ち寄ることとなる）。こうした変則的な代表システムも、ひとえに、会議への参加を望みながらも定数を満たす支持組織を持たない人々がいる一方で、代表を送るだけの十分な人数を擁しながらもそのための資金を捻出できない集団がほとんどであるという実状に鑑みた苦肉の策であった。ベルナルルラザールは、せめてトゥーフフの人々がどのような意見を代弁してほしいと考えているのか教えてもらいたいと、やや皮肉をこめた手紙を事前に執行部に送っており、また、会議の開催期間中も、各地の集団が現実

の構成員を代表として送り込めるような代表制を早急に整備すべきであると訴えたが、ついに聞き入れられなかった。次に、第二回会議において、十分な議論を経ずに多数決で可決されてしまった「ユダヤ植民信託」の設立案をめぐる、ヘルツルとベルナル＝ラザールのあいだに亀裂が走った。ヘルツルにとって、シオニズム独自の財源確保が長期的に見て不可欠であることは自明の理であった。「われわれを支えてくれる銀行家がいなのだから、われわれは、われわれ自身の銀行を設立しなければならない。これは単純な論理の帰結である。」⁽⁶⁾他方、ベルナル＝ラザールの目に、ユダヤ・ナショナリズムの命運を新しい銀行の成否に委ねるなど、狂気の沙汰としか映らない。〈ユダヤ人＝大銀行家〉という旧来の反ユダヤ主義的紋切り型を地で行くような事業を、なぜ、よりによってシオニズムの第一の原動力として制度化しなければならないのか。ウィルソンが述べるとおり、この点に関しては、ヘルツル、ベルナル＝ラザールのいずれが現実主義者で、いずれが理想主義者であったか、判ずることは容易ではない。ヘルツルの一見堅実な財政観にもとづく「植民信託」は、第四回会議（一九〇〇年）の時点でもなお創設のために必要とされた額の半分の資金しか調達し得ず、また、その資金も、ユダヤ人入植の許可と引き換えにトルコの負債の清算に充当されるものとして、スルタンから交換条件の標的にされるのが落ちであった。かたや、ベルナル＝ラザールは、理念として「植民信託」の創設を退けながら、現実にはシオニズム運動維持のための財源確保の手段としては、「ユダヤ植民協会」のような既存ユダヤ団体に頼る以外にないことも十分知っていた。それが政治的シオニズムから実践的シオニズムへの明らかな後退を意味するものとなったであろうことは言うまでもない。

しかし、なによりもベルナル＝ラザールの政治的シオニズムに対する警戒心をかき立てたのは、ヘルツルによる非公式の外交活動であった。ヘルツルは、はじめ、ドイツ皇帝ヴィルヘルム二世がオスマン・トルコ宗主権下のドイツ保護領としてユダヤ人の土地を確保することに理解を示し、手を貸してくれるのではないか、との期待を抱いた。

九八年秋、皇帝のパレスチナ訪問に合わせ、ヘルツルらシオニズム指導部もコンスタンティノーブル、エルサレムに足を運ぶ。十一月二日、一行はエルサレムでドイツ皇帝から拝謁を許され、パレスチナにおけるシオニズムの理想を直接説明する機会を得た。だが、当初の期待に反してドイツ帝国から具体的な支援を取り付けることはできず、皇帝の見解として、ただ、パレスチナにおける農業改良がトルコ帝国の福祉に合致し、スルタンの宗主権を尊重する限りにおいて好意的な関心を抱く、との公式声明が出されたのみであった。

ベルナルルラザールにとって、こうしたシオニズム指導部の独走ともいえる外交活動が、形式と内容の両面において到底受け入れ難いものであったことはいうまでもない。仮にも既存大国の保護領としてユダヤ人の土地の確保を目指すという重要な方針決定は、公正な代表制を整備した上で、あくまでシオニスト会議の承認を経て行われるべきものではないか。また、手続き以前の問題として、外交活動を通じて特定の大国の庇護を取り付けることは、シオニズム運動が大国温情主義に依存し、ひいては列強による植民地争奪戦に加担するものであることを自ら認めることになりはしないか。しかも、そこには国際政治に付き物の駆け引きがあった。ヘルツルは、ユダヤ人の苦境に対する救済策が見いだされない限り、シオニズムがヨーロッパ諸国の革命勢力に指導者と活動員を供給し続ける反体制組織たらざるを得ないだろうとして、ドイツ皇帝の革命的社会主義に対する恐怖心を利用しようとしたのである。⁽⁶⁾ベルナルラザールの政治的シオニズムに対する不信は、のちにヘルツルがパレスチナの宗主スルタンとのあいだに非公式の交渉を開始するに及んで決定的なものとなる。ヘルツルとスルタンのあいだには、トルコがシオニズムの要求を一部容れるかわりに、シオニズムの側では、当時、史上最大の規模で繰り広げられていたアルメニア人の大量虐殺を西欧諸国の世論においてできるだけ低く評価させるために影響力を行使する、という密約が交わされたのではなかったか……。

九九年一月、ベルナル＝ラザールはヘルツルに手紙を書き送り、シオニズム指導部のパレスチナにおけるドイツ皇帝謁見の真意、「ユダヤ植民信託」のあり方、シオニスト会議の代表制改革について、質問を浴びせ、厳しい批判を展開する。応じるヘルツルも次第に苛立ちの表情を隠しきれない。「わたしはシオニズムにおける可能主義者^{ポテンティリスト}です。だからこそ、それまで夢や妄想にすぎなかったものを、真面目な政治家たちに真面目に受け取ってもらえる一つの運動にまで発展させることに成功したのです。」文学的な理想主義者は、貧しい人々の擁護という口実のもと、シオニズム指導者たちの評判を落とすことしか考えていない低級な弁士どもの格好の餌にならぬよう、注意するに越したことはありません。⁽⁶³⁾

決裂はもはや避け得べくもなかった。一八九九年二月四日、ベルナル＝ラザールがニースからヘルツルに宛てた長い訣別の手紙が、今日、エルサレム・シオニスト中央古文書館に保存されている。

わたしは、シオニズムとユダヤの民の利益を考える時、もはや文学者ではありません。また、普段からわたしの思考を導き、わたしの意見を決定づけるものがあつたとしても、それは、得体の知れない政治家や三流弁士の大言壮語などではない。それどころか、わたしはずっと以前から、ある種の意見、観念、思考、傾向を持ち合わせしており、それは、あなたを導き、また行動委員会を導いているものとは根本的に相反するものなのです。あなたがたはブルジョワである。思考において、感情において、観念において、社会概念においてブルジョワである。あなたがたはブルジョワの立場から一つの民を導こうとしている。貧しく、不幸な、労働者階級からなる、われわれの民をです。「……」あなたがたは、一つの民を作り上げることよりも先に、財政として、外交として機能する一つの政府を樹立しようとする。かくして、あらゆる政府と同様、あなたがたは、財政面、外交面での失墜の

危険に委ねられているのです。あらゆる政府と同様、あなたがたは眞実を包み隠そうとする。穢れなど知らぬ体を装った民の政府になろうとしている。あなたがたの至上の義務、それはつまるところ「民族的な恥を晒さないこと」なのです。しかるに、わたしは、その恥を晒すべきだと考えるものです。積粟に腰をおろし、瓶の破片で潰瘍を引っ掻いている惨めなヨブの姿、それを人の目に触れさせるべきだと考えるものです。「……」われわれの民は、現在、もっとも卑しい泥の中におります。われわれとしては裾をたくし上げ、その民がうめき声を発している場所、喘いでいる場所、苦しんでいる場所まで迎えに行かなければなりません。われわれの民族 (Nation) を再構成すること、わたしにとっては、それこそが、最も堅実で、最も力強い、何を措いてもまず成し遂げなければならぬ事業なのです。

ベルナルル・ラザールという「稀な例外」を別として、「概してシオニスト運動は、フランスにはほとんど根づかなかつた。」『ユダヤ人問題とシオニズムの歴史』の著者ウォルター・ラカーによる、この総括に異議を差し挟むものではない。しかし、フランス・ユダヤとシオニズムの関係史においてベルナルル・ラザールの存在が、単なる一個の例外として済ませてしまうにはあまりに重要な論点を含むものであることも、ここまでの史実の素描からすでに明らかであろう。十九世紀末、フランス・ユダヤと黎明期の政治的シオニズムの絆をかううじて繋ぎ留め得たかもしれない、ベルナルル・ラザールという、ほとんど唯一の鎖の輪がこのような形で切れてしまったとしても、それは、当時のフランス・ユダヤ社会を一般に特徴づけていたシオニズムに対する無関心、無理解によるものでは毫もなく、事態はまさにその逆であったということを強調してし過ぎることはなからう。九九年三月二十四日、ヘルツル宛の最後の手紙のなかでシオニスト行動委員会からの脱退を正式に表明し、ベルナルル・ラザールはこう書き添えている。「た

だし、わたしがあなたがたと袂を分かつといつても、ユダヤの民、わが民、プロレタリアと乞食たちからなる民から離れるつもりはありません。あなたがたとは道筋こそ違え、わたしが、この民の解放のために働き続けることに依然変わりはないでしょう。⁽⁶⁶⁾」

《国家・民族・国民——結論にかえて》

否定につぐ否定、束の間の期待と絶えざる幻滅——ドレフュス事件を出発点とし、ユダヤ同化主義批判をスプリングボードとして展開した後期ベルナル＝ラザールの思想を、そのような言葉で表現することが許されるだろう。とくに本稿後半において、われわれは、十九世紀末、ユダヤ問題の可能な出口として措定されていた四つの方向性——すなわち(一)同化主義、(二)社会主義をつうじての解放、(三)実践的シオニズム、(四)政治的シオニズム——を順に検討し、その一つ一つに厳しく対峙し、限りなく接近すると同時に強靱な反発力をみせるベルナル＝ラザールの思想の軌跡を辿った。もちろん、ユダヤ問題をめぐる「四つの方向性」とは本論考における便宜上の区分にすぎず、現実には、はるかに高度な錯綜を示している。ドレフュス事件、革命以後のフランス・ユダヤ共同体、アルジェリアの反ユダヤ主義、ユダヤ・プロレタリアートとフランス社会主義、ブントの非領土的自治、ユダヤ系資本家とAUIによる慈善活動、パレスチナ入植の実践、露仏同盟、ヘルツルの政治的シオニズム、ドイツ皇帝とスルタンの政治的思惑、そしてなによりも一八八〇年頃から日増しに規模を拡大していった東欧ユダヤ人たちのエクソダスがある。すべて、ベルナル＝ラザールという一個の人間の思想を知る上で無視し得ない論点である。そして、ここには、それぞれ数十年、数百年の時間の蓄積をたたえ、それだけで長大な個別研究に値するいくつもの文脈が、交わり、分岐

し、接近しては排斥し合う、そのような歴史の巨大な渦が存在する。その中心に踏みとどまり、様々な動きに鋭敏に、誠実に反応しようとしたベルナル・ラザールの著作は、今日、整合性を保った体系というよりも、むしろ変遷と矛盾と齟齬に満ちた断片の形で、新たな評価の対象として、いや、なによりもまず再発掘の対象として、われわれの手に残されている⁽⁶⁷⁾。

ベルナル・ラザールのユダヤ・ナショナリズムは、十九世紀末、ユダヤ問題全体の議論のなかでいかなる位置を占めるものであったのか。そのことを確認するために、彼が取り上げては却下せざるを得なかったさまざまな指針に、たとえば「ユダヤ・ナショナリズム」から次のような一節を抜き出し、対置させてみることができるだろう。

なるほど反ユダヤ主義者の言い草として、「君たちは一個の民族(nation)である！」という台詞や、われわれが国家内国家(une Etat dans l'Etat)を形成しているという断言があるが、わたしの耳に、そうした言葉はまったく不快なものではない。むしろ、わたしは、そうした国家内国家がまだまだ足りないと考えているものである。つまり、より厳密な言い方をすれば、近代諸国家の内部には、互いに結びつき合いながら自律する自由集団が不足している、ということである。わたしは、人類の理想が、政治的な、あるいは知的な統合にあるとは思わない。統合として唯一必要なものがあるとするならば、それは精神的統合であろう⁽⁶⁸⁾。

さらに、ユダヤ人が反ユダヤ主義を逃れるための唯一の方策は「nationという大海のなかに紛れて、消えてしまうこと」⁽⁶⁹⁾であるという、初期ベルナル・ラザールの論断を思い起こしてみるとよい。同じnationの一語にも、その箇所では「国民」以外の訳語は考えられず、いま、反ユダヤ主義者の常套句としてベルナル・ラザールが取り上

げ、そのまま自分のものとして引き受けようとしている「君たちは一個の nation である！」という一句には、どうしても「民族」という訳語を当てなければならぬ、その理由もいまや明瞭すぎるほどであろう。しかも、これは単なる訳語の問題ではない。ユダヤのそれに限らず、あらゆる「同化主義」の論点は、いずれの辞書にも掲げられた nation の定義の二重性、すなわち「生まれ、起源を共有する者の集団」と「主権と領土に裏打ちされた政治的共同体」という、二つの定義のあいだの矛盾にそのまま帰着するとさえ言えるからだ。つまり「同化主義」は、その第一段階において、少数民族と見なされる人間集団が、national な遺産の部分的ないし全面的な放棄を前提とし、一国家内における政治的解放、つまり市民権の獲得を指向する動きである。しかし、第二段階において、同化は、各々の national な要素を等しく放擲してきた他のすべての人間集団と同じ資格で新たな人間性の次元に入ることを意味するものでは必ずしもなく、実際には、多数を占める人間集団が自明のものとして維持し続ける national な空間への一方向的な順化を意味するものとなる。national という言葉が「民族的なるもの」から「国民的なるもの」へと変質を遂げ、nationalisme が「民族主義」から「国民主義」「愛国主義」「国粹主義」にすり替わるのは、その瞬間だ。「国民」とは、かくして「国家」の回路を通して均質化され、浄化されてしまった「民族」の変異体である。とすれば、可能性として、あるいは現実性として、同化ユダヤ人たちが生粋のフランス人よりもさらに自国礼賛的になる、ドレフュスを擁護するかわりに「悪魔島」に歩哨に立つ、露仏同盟の名においてポグロムの主を讃える——のちには先を競うようにして「大いなる戦争」の戦線に立つ——といった一見グロテスクな状況も、彼らが、いかに「民族」であることをやめて「国民」となったか、いかに「国家内国家」ではなく「国家」そのものであるか、ということの証しを立てる必要に迫られる時、決してあり得ないことではなからう。まさに、ベルナール＝ラザールのいう「統治者の夢」の実現である。

統治者の夢は、子供たちが喜んで遊んでいる鉛の兵隊のように、互いに似たりよったりの人間たちを臣民として持つことである。獨自性、特殊性といったものはすべて統治者の忌み嫌うところだ。ある一つのナショナリズムの名のもと、統治者はすべての差異を駆逐し、人間の精神と意識を軍隊式に統一しようとする。⁽⁷⁰⁾

われわれが最後に考察の対象とした、ベルナルル・ラザールによる政治的シオニズム批判も、国家・民族・国民のパラダイムとともに、最大の注意を払って読み解かれるべきものである。しばしばヘルツルの政治的シオニズムが「国家主義」(étatisme)と評される理由は、それがユダヤ人「国家」の建設を目指すものであったこと以上に、ユダヤ人という存在を考え、パレスチナという土地を眺める際の、まさに国家主義的な思考の枠そのものにある。「シオニズムは一つの民族を作り上げることよりも先に一個の政府を樹立しようとしている」とのベルナルル・ラザールの批判は、まさにその点を突くものといえよう。議会代表制の欺瞞、官立の信託銀行を中心に据えた経済活動、外交政治の駆け引き、すべてそのような個々の論点にこだわりながらベルナルル・ラザールが危惧するのは、ヘルツルの国家主義に則って創設されたユダヤ人「国家」に当然予想される、ユダヤ「民族」の「国民」化にほかならない。シオニズムは、「ある一つのナショナリズムの名のもと、すべての差異を駆逐し、人間の精神と意識を軍隊式に統一しようとする」既存諸国家の群に、大同小異の国家を新たに一つ付け加えることに終始してはならない。繰り返すが、その批判は単なる「稀な例外」以上の意味をもって、シオニズム史に重くのしかかるものだ。

ユダヤ問題の根本に立ち返り、問題の問題たる所以を問題とするような形で、ベルナルル・ラザールは、ユダヤ人が一つの「民族」(nation)たり続け、近代諸国家のなかで「国家内国家」(un Etat dans l'Etat)を形成すること

は、恥ずべき事態でも、解決すべき「問題」でさえもなく、むしろ人類の多様性という観点からすれば、歓迎すべき、積極的に維持されるべき状態であると主張する。

人類に必要なものとして多様性にまさるものはない、とわたしには思われる。これと反対のことを言う人々は、単に間違っているか、あるいは肝心なことを見落としているのだ。そのような人々にとって、人類とは、人類学的な表出であったり、政治的な表出であったり、経済学的な表出であったりするのだらう。しかし、人類はまた別のものでもあらねばならない。それは美的な表出 (une expression esthétique) としてあらねばならないのだ。人類がそうあり続けるためには、なによりもまず、この多様性を維持しなければならぬ。「∴」人類の豊かさは、種々の多様性から成り立っているのだ。かくして、どんな人間集団も、人類にとって欠かすことのできない、有用なものである。それぞれの集団が、世界に一片の美を付け加えることに寄与しているのだ。⁽¹⁾

ユダヤ民族にとって、この状態がパレスチナの土地で実現されるべきか、既存国家の枠内で実現されるべきか、それを知ることは、もはや二次的な問題となる。ユダヤ同化主義からも政治的シオニズムからも遠ざかり、非領土自治や実践的シオニズムからも一線を画した、このようなベルナル＝ラザールの後期思想を指して「審美的シオニズム」(Je sionisme esthétique)、さらには、明らかな語義矛盾を逆手に取るようにして「離散的シオニズム」(Je sionisme diasporique) と評される理由が、こうして徐々に明らかとなる。

- (1) 《Solidarité》 art. cit., p. 25; 《Le Nationalisme et l'émancipation juive》, art. cit., p. 174
- (2) 《Le Nationalisme et l'émancipation juive》, art. cit., pp. 175-176
- (3) 一八九五年一月十七日、王党派議員ブレイン・ド・ボンブリアン伯爵によって提出された法案。同二月十一日、一九八名の議員の賛同を得てランド県選出議員テオドール・トゥニが行った質問。同五月二十五、二十七日、ブリソン内閣に対する質問に立ったトゥニの発言。Cf. Theodore Reinach, *Histoire de l'affaire Dreyfus*, tome II : Esterhazy, 1903, p. 198 note 2; Zeev Sternhell, *Maurice Barrès et le nationalisme français*, (1972), Editions Complexe, 1985, p. 238 note
- (4) 《La Nationalisme et l'émancipation juive》, art. cit., p. 179
- (5) Marrus, *op. cit.*, pp. 268-271; Richard Ayoun, 《Les effets de l'affaire Dreyfus en Algérie》, *Archives juives*, no 27/1, 1er semestre 1994, pp. 58-71
- (6) Wilson, *op. cit.*, p. 278
- (7) 《La loi et les congrégations》, *Cahiers de la quinzaine*, III-21, 16 août 1902, p. 216
- (8) ラカー、前掲書、三九〇〜三九二頁。ポントの綱領はシオニズムとの対立を明確にする一方、社会主義陣営内では、革命における national なものの位置づけをめぐってホルシュェビキと敵対する。ロシア革命後の一九二一年にはレーニンにより異端思想として禁止され、一部は「イスラエルの地」の完全な社会主義化を条件としてシオニズム左派に合流し、「労働シオニズム」の中心勢力を構成するにいたる。残存勢力は、両大戦間のポーランドにおいて主張を守り続けたが、ナチ時代、組織としては完全に壊滅させられてくる。
- (9) *L'Antisémitisme, son histoire et ses causes. op. cit.*, p. 326
- (10) *Ibid.*, p. 345
- (11) *Ibid.*, p. 348
- (12) J. Tchernoff, *Dans le creuset des civilisations*, tome 3. *De l'affaire Dreyfus au dimanche rouge à Saint-Petersbourg*, Editions Rieder, 1937, p. 65

- (13) Cf. Nancy Green, *Les travailleurs immigrés juifs à la Belle Epoque—le "Platz de Paris"*, Fayard, 1985
- (14) Maître Jacques, «Proletaires juifs», *Les Droits de l'Homme*, 17 septembre 1899, p. 1 (巻頭論断)
- (15) Thargelion, «Le Meeting des Proletaires juifs», *L'Aurore*, 18 septembre 1899, p. 3
- (16) Jean Jaurès, «Toute la clarté», *La Lanterne* du 15, datée du 16 janvier 1898
- (17) Wilson, *op. cit.*, p. 248
- (18) Lettre non datée de Bernard-Lazare à Joseph Reinach, Bibliothèque Nationale de France, cabinet des manuscrits, N. A. F. 24697 f. 218 ; extrait dans Gauthier, *op. cit.*, p. 89
- (19) 渡辺一民『エレーノホス事件——政治体験から文学創造への道程』筑摩書房、一九七二年、二八〇―二九頁。
- (20) «La conception sociale du judaïsme et le peuple juif», *La Grande Revue*, septembre 1899 ; repris dans *Juifs et anti-sémites*, *op. cit.*, pp. 183-184
- (21) 問題となったシヨロスのユダヤ観は、一八九八年十二月十三日付『ラ・プティット・レジュブリック』紙の論説のなかで展開された。
- (22) «La conception sociale du judaïsme et le peuple juif», art. cit., p. 211
- (23) «Le Nationalisme et l'émancipation juive», art. cit., p. 176
- (24) Michel Berr de Turrique, *Appel à la justice des nations et des rois, ou Adresse d'un citoyen français au congrès qui devait avoir lieu à Lunéville, au nom de tous les habitants de l'Europe qui professent la religion juive*, Strasbourg, impr. de Levrault frères, an X (1801)
- (25) Phyllis Cohen Albert, «Ethnicité et solidarité chez les Juifs de France au XIXe siècle», *Partès*, no 3, 1986, p. 35
- (26) Lion-Mayer Lambert, *Précis de l'histoire des Hébreux, depuis le patriarche Abraham jusqu'en 1840*, Metz, chez l'auteur, 1840 ; Cf. Albert, art. cit., p. 35
- (27) Albert, art. cit., pp. 42-43

- (83) Ernest Laharanne, *La Nouvelle question d'Orient : Empires d'Egypte et d'Arabie ; reconstitution de la nationalité juive*, E. Dentu, 1860 ; Joseph Salvador, *Paris, Rome, Jerusalem, ou la question religieuse au XIXe siècle*, 2 vols., Paris, Michel-Lévy frères, 1860
- (29) ミカド、前掲書、七四頁、ならびに八五二一―八五三三頁。
- (30) 同、八五三頁。
- (16) James Darmesteter, *Joseph Salvador*, Versailles, Impr. de Cerf et fils, 1881 ; André Spire, *Quelques juifs : Israël Zangwill, Otto Weininger, James Darmesteter*, Société du "Mercure de France", 1913
- (82) Michael Graetz, *Les Juifs en France au XIXe siècle—de la Révolution française à l'Alliance israélite universelle*, Seuil, 1989, traduit de l'hébreu par S. Malka
- (83) Albert, art. cit., pp. 42-44
- (75) Albert, art. cit., p. 39 ; cf. Natalie Isser, *Antisemitism during the French Second Empire*, New York/San Francisco, Peter Lang, 1991
- (85) *Dictionnaire des Intellectuels français* sous la direction de Jacques Julliard et Michel Winock, Seuil, 1996 ⑥ "Alliance Israélite Universelle" (Annette Wievorka 以下) の項参照。A・I・Uは、現在なお、パリ九区、ラ・ブリュイエール街に本拠を置き、世界八カ国に合わせて二万人以上の生徒を擁する教育機関を経営するほか、パリで哲学者シュミュエル・トリガノを学長とする「ユダヤ研究コレージュ」を運営し、毎年シンポジウムを開催するなど活発な文化活動を展開している。一八六〇年の創設以来の歴史を誇るその図書館は、十二万冊の蔵書をもってヨーロッパ有数のユダヤ資料館となっている。
- (36) Narcisse Leven (1833-1915) A・I・Uの共同創立者の一人。一八九一年、「ユダヤ植民協会」会長。
- (37) Emile Meyerson (1859-1933) タルムード学者を多く輩出したルブリンのユダヤ人家庭に生まれる。ドイツで化学を学んだのち、一八八二年、パリに移り、のちにフランスに帰化。パリ大学心理学研究院で助手をつとめる。生涯教壇に立つことはなかったが、ポワンカレ、ブランシュヴィックらとともに二十世紀初頭の科学哲学の潮流を代表し、哲学者、歴史家、文学

- 者たちとの親交をつうじて同時代の思想界に及ぼした影響は大きい。自らはユダヤ教の信仰をすでに失っていたが、東欧ユダヤ人の境遇には並々ならぬ関心を寄せ、パレスチナにおけるユダヤ人入植地の経営に関して長くエドモン・ド・ロトシルドの相談役をつとめたほか、「ユダヤ植民協会」のフランス代表として生涯事業に積極的に関わった。著書に『同一性と現実』(一九〇八年)、『思想の歩み』(一九三一年)など。
- (38) Wilson, *op. cit.*, p. 111
- (39) 《Solidarité》, art. cit., p. 23; 《Le Nationalisme et l'émancipation juive》, art. cit., p. 171
- (40) André Chouaqui, *Cent ans d'histoire: l'Alliance israélite universelle et la renaissance juive contemporaine (1860-1960)*, 1965, préface de René Cassin. 并に「第三章」を参照。
- (41) Graetz, *op. cit.*, pp. 382-383
- (42) Marrus, *op. cit.*, pp. 185-186
- (43) *Ibid.*, pp. 288-289
- (44) Green, *op. cit.*, pp. 74-75
- (45) 《Le nationalisme et l'émancipation juive》, art. cit., p. 179
- (46) Esther Benbassa, 《L'Alliance israélite universelle et le sionisme》, *Archives juives*, no 30/2, 2e semestre 1997, p. 42
- (47) ラカー『前掲書』一六六―一七〇頁。
- (48) Jean-Denis Bredin, *Bernard Lazare, de l'anarchisme au prophète*, Editions de Fallois, 1992, p. 289
- (49) *Idem.*
- (50) Max-Simon Südefeld, dit Max Nordau (1848-1923) ノスト(現ブダペスト)生まれのユダヤ系ハンガリア人。ペストで医師として働いたのち、パリへ移り、ドイツ語、フランス語で著作活動を開始。ロンブローゾ、スペンサーとともに『ラ・ルヴェー・デ・ルヴェー』の寄稿者となる。『現代文明の因習的な嘘』(一八八三年)、『世紀病』(一八八九年)、『退廃』(一八九三年)といった文明批評によって名声を得る。九五、パリで出会ったヘルツルによりシオニズムに共鳴。行動委員

会のフランス支部長に指名される。ヘルツルの死後もシオニスト会議において彼の遺志を代弁し続けた。

- (51) Wilson, *op. cit.*, p. 301 ヘルツル・ラザールの奔走も虚しく、『ユダヤ人国家』のフランス語訳のための出版元を見つかることはできなかった。結局、その仏訳は『ラ・ヌーヴェル・ルヴェー・アンテルナシオナル』誌、一八九六年十二月三十一日号と一八九七年一月十五日号に二度に分けて掲載された。
- (52) *The Diaries of Theodore Herzl*, London, M. Lowenthal, 1956, p. 184, cité par Wilson, *op. cit.*, p. 303
- (53) Alain Boyer, *Theodore Herzl*, Albin Michel, 1991, p. 91
- (54) *Ibid.*, p. 94
- (55) Catherine Nicaul, *La France et le sionisme 1897-1948—une rencontre manquée ?*, Calmann-Lévy, 1992
- (56) «Le Proletariat juif devant l'antisémitisme», art. cit., p. 140
- (57) Archives sionistes centrales de Jérusalem, H. VIII, 479, cité dans Bredin, *op. cit.*, pp. 305 et 307
- (58) *The Jewish World*, 3 juin 1898, cité dans Wilson, *op. cit.*, p. 319
- (59) 一参加者の証言。Wilson, *op. cit.*, p. 320
- (60) *Ibid.*, pp. 321-322
- (61) シカゴ前掲書、一六一〜一六四頁。
- (62) 同、一七四〜一七五頁。
- (63) Lettres de Herzl à Bernard-Lazare, citée dans Wilson, *op. cit.*, p. 326 et dans Bredin, *op. cit.*, p. 314
- (64) Lettre de Bernard-Lazare à Herzl, datée du 4 février 1899, Archives centrales sionistes de Jérusalem, citée dans Bredin, *op. cit.*, pp. 315-316
- (65) シカゴ前掲書、五七頁。
- (66) Lettre de Bernard-Lazare à Herzl, datée du 3 mars 1899, Archives centrales sionistes de Jérusalem, citée dans Bredin, *op. cit.*, p. 316

- (67) 本稿を書き進める上で最大の典拠となった論集 *Juifs et antisémites*, édition établie par Philippe Oriol, Editions Alia, 1992 に収められた論説と、別に一冊にまとめられた既出遺稿集『ヨブの積藁』以外に、「祭式裁判」をめぐる史的ノート、「カトリックの共和国」と題されたキリスト教会論、反教権主義批判など、数々の重要な遺稿が未刊行のままバリのA I U 図書館に古文書として保存されている。
- (68) 《Le nationalisme juif》, art. cit., p. 146
- (69) 《La nationalité Française et les juifs》, art. cit., p. 55 本稿（上）' 一三七頁参照。
- (70) 《Le prolétariat juif devant l'antisémitisme》, art. cit., p. 137
- (71) 《Le nationalisme juif》, art. cit., p. 158